

2023年度

入学試験問題

国語

50分

1. 受験番号・氏名を解答用紙に書くこと。
2. 受験番号は算用数字で書くこと。(例:123)
3. 鉛筆などの筆記用具・消しゴム以外は使わないこと。
4. 用紙を立てて見ないこと。
5. 質問(印刷不明のところだけ)のある場合、鉛筆などを落とした場合、
トイレに行きたくなった場合、気持ちが悪くなった場合は、だまって
手をあげること。
6. 解答用紙のみ回収します。

【一】次の文章を読んで、あとの間に答えなさい。

時代が移り変わり、価値観が変化する中で、依存症という病気のとらえ方もまた大きく変わりつつあります。依存症という呼び方すら変わる可能性があります。実際、アメリカの医学界は、すでに薬物依存については「依存」という言葉を使うのをやめ、「物質使用障害」と呼ぶようになりました。

依存という言葉は、「依存性のある薬物をくり返し摂取すると、馴れが生じ、同じ効果を得るために必要な量がどんどん増えしていく。そして、急にやめると離脱症状（洋リバウンドのような症状）が出る」という現象を指しています。ただし、これは、動物実験でわかつたことにすぎません。これだけでは説明のつかないことがあります。例えば、がんの激しい痛みをしずめるために医療用麻薬を使うことがあります。けれども、その患者が依存症になり、病院から麻薬を盗んだ、もしくは売人から不法に入手したなどという話は聞いたことがあります。医療用麻薬は、症状によつてはかなりの量をある程度の期間使いつづけます。だから、馴れも生じるし、量も増えていきます。それでも、医療用麻薬を使つている患者を依存症とは呼びません。アトピー性皮膚炎などの治療に使われるステロイドという薬もまた、使い続けるうちに馴れが生じるもの一つです。内服薬として継続的に使つていた場合、急にやめることは難しく、ゆっくりと少しづつ量を減らしていくかなければなりません。しかし、だからといってこの薬を使つている患者が依存症として扱われることはありません。第3章に書いたように、依存症のしくみは脳のメカニズムにあります。それはそれで、理解しておくべき事実です。しかし、複雑な社会の中で生きる僕たち人間は、それだけですべてを説明しきれるほど単純なものでしようか。①僕は、そうは思いません。脳のしくみを解明するだけでは、依存症という病気の核心にはたどり着けません。歪んだ人間関係の中で心に痛みを抱え、それを放置したまま薬物あるいは特定の行為で一時しごぎをつづけ、いつしかコントロールできなくなつて生活が破綻してしまう。これが依存症の全貌です。つまり、依存症という病気は、僕たちがどんな人間関係を築き、どんな社会をつくっていくのかということと直結しているのです。

【A】僕は、依存症がこの世からなくなることはないだろうと考えています。絶望的になつてゐるわけではなくて、人間は、どんな時代も、何かしらよりかかるものを必要としているような気がするのです。

【B】面倒な単純作業をしなければならないとき、昔聞いた歌をいつのまにか頭の中でぐるぐるとループしていること、ありませんか？ それから、授業がどうにもつまらないときに、ノートを取つてゐるふりをしながらラクガキしたり、わけもなく图形を塗りつぶしたり。多くの人は身に覚えがあるでしよう。人間は、ストレスを感じる状況に置かれたとき、それをやりすごすために気をまぎらわせようとするものなのです。そして、僕たちの祖先は、そうやって気をまぎらわせるのにうつつてつ

けのものを見つけました。アルコールやカフェインをはじめとする薬物です。やがて社会が複雑化したとき、それを乱用する人が出てきてしまつたわけですが、何かで気をまぎらわせるという行為は、僕たち人間の知恵もあります。

【C】現代では依存性物質とされているタバコは、かつて儀式や治療に使われるものでした。大勢の人が日常的に楽しんでいるアルコールが、違法だった時代もあります。大麻が違法とされる国もあれば、合法とされる国もある。ゲーム依存は問題になるのに、どれだけ本を読んでも問題にならないのはなぜでしよう？ その時代、大人たちが気にくわないものを依存と称して突き放しているようなきらいさえあります。1日10時間以上勉強して、勉強以外のことがおろそかになつたとしても「勉強依存」とはいいませんしね。1980年代、あれほど多かつた洋シングナー依存は、不良文化の衰退とともに激減しました。インターネットができればインターネット依存が生まれ、スマホが浸透すればスマホ依存が問題になります。

【D】結局、「〇〇依存」と名前をつけて問題になるものの総量は、どんな社会でも、どんな時代でも、それほど変わらないのかもしれません。ある依存症がなくなつたところで、別の依存症が生まれるだけ。だとしたら、何に依存しているかということよりも、根本にある生きづらさのほうに目を向けて、それを生み出す社会のあり方を疑問視るべきです。

【E】違法薬物を使うことを「被害者なき犯罪」と表現することができます。では、依存症によつて傷つく人はいないのでしょうか？ そんなことはありません。十中八九、家族は大変な思いをするでしよう。中高生なら、先生や友達に迷惑をかけるかもしれません。働いている人なら仕事に影響が出て、周囲の人を困らせたりもするでしよう。しかしながら、一番傷ついているのは、おそらく依存症になつた本人ではないでしようか。もともと歪んだ人間関係の中で悩みや苦しみ、心の痛みを抱えていたのです。そのうえ依存症によつて健康を害し、生活が壊れ、場合によつては差別すらされてしまうのですから。違法薬物の場合は、とりわけ厳しい差別や偏見にさらされます。人とつながることができなくて、孤立しているから依存症になつたのに、依存症になつたことでますます孤立を深め、回復から遠ざかっていくのです。

②こうした負の連鎖を少しでも減らしていくためには、根本的な問題に向き合わなければなりません。虐待やいじめをしていくことはもとより、暴力や支配の背景には、貧困や失業、過激な受験戦争や少子化などがあります。貧困家庭を支援したり、経済格差を正したり、社会のしくみから見直すべきなのだろうと思います。

そうやつてできるだけの工夫を重ねたうえで、気をまぎらわせるツール、すなわち薬物やゲームやギャンブルといったものを撲滅するのではなく、うまくつきあつていく。そうできたらいいなと思います。もちろん、度を越して使つてしまふ人はゼロにはならないでしよう。どんなによりよい社会になろうとも、それは難しい。であれば、そういう人が出てくることをあらかじめ想定したうえで、社会をつくつておけばいいのです。切り離し、辱め、排除するのか。それとも心の痛みに寄り添い、

回復を支援し、もう一度迎え入れるのか。僕は、後者のような社会でなければ、依存症になつた人に限らず、みんなが幸せになれないよう思います。

アメリカでは、アルコール依存症や薬物依存症から回復して社会に復帰した人たちは、人々から^(注3)リスペクトされます。有名な俳優やミュージシャンたちが依存症からの回復を公表し、^(注4)自助グループにも積極的に参加しています。そのことが、依存症への誤解や差別を減らし、また回復の途中にある人を勇気づけています。

僕は、日本でも、依存症から立ち直った人が一般の人々に触れ合う機会がもつとあつたらしいのにと考えています。みなさんにも、ぜひそういう人に会つてもらいたいです。学校で行われている薬物乱用防止教育では、「ダメ。ゼッタイ。」^(注5)というキヤツチコピーのもと、一度でも薬物に手を染めたら人生が台なしになるかのように伝えられています。しかし、事実は違います。こうしたやり方は、依存症とは縁のない子に差別や偏見の種を植えつけます。一方で、自分は依存症ではないかと不安になっている子、すでに依存症になつてている子を深く傷つけます。

依存症には、ならないほうがない。その理由は、この本の中でくり返し伝えてきたつもりです。ただ、依存症になつたからといつて、人生おしまいではありません。人は失敗することがある。だけど、そこから立ち直ることもできる。^(注6)そういう希望を持つ社会のほうが、ずっといいと思いませんか？

（松本俊彦『世界一やさしい依存症入門』）

（注1）リバウンド 投薬を突然やめたとき、急激に症状が悪化すること。

（注2）シンナー

前の一章で筆者は「シンナーとは有機溶剤（塗装や洗浄などに使われる有機化合物）の一種で、脳の働きを抑制する薬物です。当時の不良たちはこれをビニール袋に入れ、氣化したものを吸つていました」と説明している。

（注3）リスペクト 尊敬。

（注4）自助グループ

同じ問題をかかえる人たちが集まり、相互理解や支援をし合うグループ。

問一 傍線部①「僕は、そうは思いません」とあります。それはどういうことですか。解答欄に合うように四十五字以内で答えなさい。

問二 本文には、次の【 】の文章が抜けています。【 】の文章が入るところとして最も適当なものを、文中の空欄【 A 】～【 E 】から選び、記号で答えなさい。

【 考えてもみてください。依存症として問題視されているものとされていないものの線引きって、どこにあるのでしょうか。】

問三 傍線部②「こうした負の連鎖」とあります。それはどのようなことですか。

問四 傍線部③「そういう希望を持つ社会」とありますが、筆者はどのような社会をつくるのがよいと考えていますか。

問五 本文の内容と一致するものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 一般の人と依存症から回復した人とがかかわりあう機会を増やすことが、日本では積極的に行われている。
イ がんなどの激しい痛みを和らげるために医療用麻薬を使い続ける患者も、依存症として扱うことができる。
ウ 昔は問題視されず、治療に使われていた物質が、現在は依存性の高い物質として問題視されることがある。
エ 違法薬物を使い依存症になることで一番傷ついているのは、それを使用した本人ではなくその家族である。
オ ストレスのかかる状況をやりすごし、気をまぎらわせるためのものを初めて発見したのは、現代人である。

〔二〕次の文章を読んで、あとの間に答えなさい。

「あなたのクラスに転校生が来たつて？」
「サランが^(注1)ナルの教室の前で待つていた。

「そう、となりの席だよ」

ナルがぶつきらぼうな返事をした。

「ほんと？ みんなカツコいいつていつてたけど、どこどこ？ どんな顔か見てみたい」

サランが後ろの戸口から教室をきよろきよろと見回した。ナルはサランのリュックを引っぱつた。

「カツコいいつてだれが？ 早く部室に行こうよ」

ナルは廊下を走りながら、頭の中でテヤンのことを見いだした。

長い腕ははつきり覚えている。体育会系で何よりも重要なのは顔ではなく体だ。

ナルとサランが部室に入ると、コーチと部員たちがふたりを待つていた。後輩たちの顔を見て、すでに^aおじけづいているのがわかつた。しかたない。今日は大会の反省会がある日だから。反省会は、試合の映像を見ながら、これからもつと力を入れるべきことについて考える集まりで、大会に引けを取らないくらい大切な時間だつた。でも、それはコーチの考え方であつて、部員たちにとつては、けつぎよく怒られる時間にすぎなかつた。大会の経験が多い六年生だつて、反省会の日は部室に来たくないのに、初めて全国大会に参加した後輩ならなおさらだらう。

楽しくない反省会だつたが、ナルは内心期待しているところがあつた。あのキラキラのかがやき。きのうの試合映像を見れば、コーチだつて^(注2)キム・チョヒの水着があやしいといふことに気づくはずだつた。

あれは規定の水着じやないだらう。水泳連盟に連絡してメダルを取り消さないと。

そこまではしないにしても、コーチならただじやおかないはずだつた。ナルはそう思うだけでもこれまでの屈辱感が吹き飛ぶような気がした。

「わかつたか？ いまの話を忘れないで、練習のときに生かすようにしよう。それじや、最後の映像を見ようか」

ナルの番が来た。コーチがナルの試合映像を画面にうつした。ナルは胸をドキドキさせながらだまつてコーチの表情をうかがつた。でも、コーチは最後までちつとも表情を変えずに、落ち着いて画面をじつと見ていた。

「もう一回ゆつくり見てみようか」

コーチは映像をスローで再生した。画面の中のキム・チョヒは、ナルより1メートルも後ろにいる。だが、少しづつピッチを

あげると、やがてナルをぬいた。自分を^お追い越していくキム・チョヒの姿がありありと目に浮かぶようだつた。いま思つても、手から力がぬけて、こぶしが握れないほどだ。コーチが一時停止ボタンを押した。

「ナル、ここから急に体勢がくずれるな。どうした？ ローリングがぜんぜんできてない」

静止画面にうつっている自分のボーズが笑えた。手足の動きがバラバラで、助けてくれと、もがいているようだつた。

「テンポを失いました」

「なんで？ キム・チョヒにぬかれたから？」

ナルは何度も経験していることなのに、いざコーチからそういうわれると、プライドが傷ついた。

「それならもつとキックを強くするなりなんなりして、前に出ようとしないと。こうやつてくじけちゃダメだよ。水泳はメンタルの勝負なんだから」

ナルも知つていた。競泳はどの種目より集中力が必要だと。自分には、息びつたりのチームメートもいなければ、体の弱点をおぎなう特別な技術なんてもしない。信じられるのは、もつぱら自分と水だけ。でも、ときには、水さえ自分の味方ではない。選手になつてから痛いほど思い知つたことなのに、体が思うように動かないと、どうしても孤独な気持ちがしてしまつ。試合が始まつたら、自分しか信じられないのに、そんな自分とたえず闘わなければならぬ。

ナルはコーチからそうアドバイスされると、悲しさを通り越してくやしくなつた。いまコーチがちゃんと見なければいけないのは、ナルではなくキム・チョヒなのに。わかっているくせにわからないふりをしているのか、本当にわからないのか、ナルはどうしても確かめたかつた。

「①メンタルの強さだけで勝てないときだつてありますよね」

「なんの話だ」

コーチがきいた。こうなつた以上、話をやめるわけにはいかなかつた。ナルはついに自分から切り出した。

「相手が反則をおかしたとしたら？」

「反則？ きのうだれか失格（DQ）したつけ？」

ずっとよそ見していたセチャンが、反則の話に興味がわいたのか、割りこんできた。

「先生はへんだと思いますか？ キム・チョヒって、もともとそんなに速い子でもなかつたのに。あの子つて絶対何かあるはずです。水着だつてあの子だけ目立つてるじやないですか。あれつてほんとに競技用ですか？」

ナルは、キム・チョヒがあやしいといふことを説明するこの瞬間でさえ、キム・チョヒが速いといふ事實をみとめなければいけないのがイヤだつた。

「キム・チョヒの水着がどうしたの？」
部員たちが画面に近づいて、キム・チョヒの水着をじろじろと見つめた。でも、コーチは画面ではなくナルにじつと目を向けていた。

「ほんとだ。あの子の水着だけめつちやキラキラしてる」
サランがとなりでナルの肩を持つた。

「そんなバカな」

だまつていた^(注3)スンナムがいつた。

「身につけたら超能力^(注4)が出るスパイダーマンのスーツじやあるまいし。水着のせいで負けたなんて、話に無理があるだろ？」

スンナムの声から⁽²⁾がつかりしたようないら立ちが伝わってきた。セチヤンとドンヒはスパイダーマンの話に反応して、おたがいに手首からクモの糸を放ち合うふりをし始めた。そのようすを見ていた後輩たちも、ふたりの悪ふざけにクスクスと笑い始めた。けつきよくサランが、空気の読めないじやまものたちを外に連れ出した。ナルはこの絶体絶命のピンチにも、自分の味方になつてくれないスンナムがにくらしかつた。

「全身水着を着たらタイムがちぢまるつて話、知らないの？　あやしい薬を飲んだのが、あとからバレることだつてあるし。あの子だつて何かあるかもしれないといつてるだけなのに何よ！」

「全身水着を着たらタイムがちぢまるつて話、知らないの？　あやしい薬を飲んだのが、あとからバレることだつてあるし。あの子だつて何かあるかもしれないといつてるだけなのに何よ！」

「ナルがいつたとおり、あれが特殊^(注5)な水着だとしよう。じゃあ、あれを着たら、タイムがどれくらいちぢまるの？」

「どれくらいいちぢまるかの問題じやないでしょ？　決勝ではちょっとのちがいが致命的^(注6)なの！　あんたにはそれがわからないだろうけど」

スンナムの眉^(まゆ)がピクツとした。

「カン・ナル、ちょっとと言葉がひどくないか？」

「ふたりともそこまでにしなさい」

見かねたコーチがふたりのケンカを止めた。ふたりは顔をそらした。

「あれが問題のある水着だつたら、キム・チョヒは試合に出られなかつたはずだ」

ナルはまだ何かをいいはりたいと思つたが、何もいうことが見つからなかつた。

「ナルは、少し気持ちを整理したほうがよさそうだね」

ナルの心は、整理どころかぼつくり折れてしまつた。ナルとスンナムは六歳^(かんこく)（韓国は生まれたときを一歳とする数え年）のときにはYMC^(注7)Aの子どもスポーツ団で初めて会つた。ふたりとも鼻から水が入つてコホンコホンとせきこんだ瞬間から、ひとりは漢江小水泳部のエースになり、もうひとりは部長になつたままで、ふたりの水泳歴はそつくりそのまま重なつてゐる。

水の中でも外でも、うれしいときもつらいときも、ナルのとなりにはスンナムがいた。そんなスンナムが、初めてナルに背を向けた。ナルはさびしさのあまり、自分がスンナムをどれほど傷つけたかについては考えられなかつた。ナルが切実に優勝を願うように、スンナムだつて自分の決勝進出を心から望んでゐる。そんなことを知らないはずはなかつた。これだけはスンナムも怒りがおさまらないのか、ナルからうんと離れたまま立つてゐた。八年の友情に危機がおとずれた。

ふたりのあいだに冷たい風が吹きこみ、水泳部の空気も冷えてしまつた。そのおかげでといふべきか、練習ではだれひとりふざけることなく、すつかりまじめな雰囲^(ふんい)気で行われた。

テヤンが部室にやつてきたのは、それから二日後のことだつた。

「こんちは」

水泳部の全員が、ちようど部室に集まつていた。テヤンはナルと目が合うと、こつそり手をふつた。ナルとテヤンを交互^(こうご)に見る部員たち。ナルは「何も知らない」と伝えるために肩をすくめてみせた。スンナムがテヤンを上から下までじろじろながめた。自分より背が高いのに、ほつそりした体つき。顔は……スンナムはそれとなく鏡のかわりにスマホの画面に自分をうつして髪をいじつた。

「あつ、二組の転校生、チヨン・テヤンでしょ？」

サランが声をかけると、ぎこちなく立つていたテヤンがうなずいた。

「そうなのかな。なんの用事？　だれかのお使いか？」

コーチがきいた。テヤンはコーチの前に行つて、あらためて深ぶかと頭をさげた。

「こんには。六年二組のチヨン・テヤンです。水泳部に入りたいです」

とつぜんの申し入れに、部員たちがおどろいた。水泳部には、ふつう放課後の水泳教室ですばぬけた実力の子がすいせんに入れるか、両親とコーチの話し合いで低学年のときから入るか、がほとんどだつた。テヤンのようにも無鉄砲に押し入つてきて、入部を申し入れるケースは、見たことがない。でも、思いのほかコーチはうれしそうにテヤンを迎えた。

「そうか。チヨン・テヤン、よく来たな。スンナム、みんなをジムに連れてつて運動を始めて」

コーチがスンナムにトレーニング日誌を手わたした。部員たちはそのまま部室に残つて、どんな話をするのかききたかつたが、

コーチの目つきに押されてだまつて外へ出ていった。

「何？　アイツ、水泳やつてるの？」

サランがびつくりした声でいった。びつくりしたのはナルも同じだけれど、おどろいたそぶりは見せなかつた。

「選手登録してる子なら、コーチは転校してくる前から知つてたはずだろ」

スンナムのいうとおりだ。大会の成績がぜんぜんよくなかったとしても、選手ならコーチが知らないはずはない。全国の小学校の競泳選手が千五百人以上いたとしても、コーチどうしはみんな知り合い同然なのだ。

「じゃあ、いまからやるつもりなのかな」

「え？　六年生なのに、いまさら？」

部員たちは、ありえない話だと口をそろえていたが、内心、新しい仲間ができるかもしれないという期待で、なんとなくウキウキしていた。

「シツ、静かに」

セチャンはさつきからドアに耳を当てて、テヤンとコーチの会話にきき耳を立てている。何もきこえないだろうに、ドアに耳を当ててているだけで何かつかんだような気がするのか、目がキラキラとかがやいている。

「もう運動しに行こうよ」

スンナムが真ん中に立つて、その両側から部員たちが向き合うように輪になつた。一、二、三、四と号令に合わせて準備運動を始めた。

ナルは、テヤンが本当に水泳部の部室をおとずれるとは、思つてもいなかつた。数日前に、テヤンから入部したいときいたときは、「水泳部を甘く見るな！」といいたいのをぐつとこらえた。授業中だからがまんできたわけで、休み時間だつたらきっとがめ立てただろう。ナルは、泳ぎにちょっと自信があるという男子から舞いこんでくる挑戦状に、うんざりしていた。テヤンがどういう考え方で来たのかは知らないが、どうせコーチが受け入れるはずはない。ナルはコーチが水泳にかんしては甘くないということを、だれよりもよく知つていた。

ナルがキム・チヨヒの水着を疑つたことだつて、コーチはあつさりと解決してくれた。国際水泳連盟に承認されている水着モデルのリストから、キム・チヨヒの水着を見つけてくれたのだ。有名メーカーの新商品でキラキラがついているだけの、変わつたところのない水着だつた。

「すみません」

じつは、ナルも知つていた。水着の問題じやないと。キム・チヨヒは、ナルより速いだけなのだ。でも、それをみとめてしまうと、このまま負け続けてしまいそうで怖かつた。どんないわけをしてでも、この状況から逃げ出したかつた。でも、コーチがわざわざそこまでして、ナルの目の前で確認をしたのは、これ以上逃げてはいけないという警告なのかもしれない。

「きのうお母さんから電話があつたよ。かなり心配されているようだつた」

ナルはここ数日間、見苦しいところばかり見せていた自分が、はずかしくなつた。お母さんにも、スンナムにも、^③申し訳ないと思う気持ちが満ち潮のように押しよせてきた。

「ナル、わたしは勝ち負けだけが水泳じやないと思うんだ」

「でも、試合は勝つためにやるものじやないですか。アタシ、勝ちたいんです」

コーチが軽くため息をついた。

「ナルのいうとおりだ。でも試合で一生勝ち続ける選手なんてひとりもいない。だれにだつて負けるときがあるんだよ。もしかしたらどう負けるかが、どう勝つかより大切かもしれない」

コーチは、ナルには理解できないことをいうときがある。このあいだは気持ちを整理しろといつて、今日は負けるのが勝つよりも大切だといつてはいる。ナルが知るかぎりで、そんな試合はない。

「④よくわかりません」

「どうして水泳をやつているのか、一度自分でちゃんと考えてみるといいよ」

ナルは試合がなくとも、月曜日から金曜日まで毎朝一時間、ひとりで練習をする。それから授業が終わると、水泳部で二時間、今日みたいに陸上トレーニングか水中トレーニングをする。特訓期間中には、週末も休まない。ナルは好きでしているけれど、いつも楽しいわけではない。なのに毎日早起きするのも、真冬にがまんしてプールに行くのも、心臓がバクバクしているうちにまたスタートするのも、腕と足がズキズキ痛くてもなわとびを決まつた回数までとぶのも、けつきよく試合で勝つためではなかつたか。ナルは水泳で勝つこと以外に、どんな意味があるのかがわからなかつた。ただ楽しむだけなら、こんなに苦しまなくていいはずだ。

（ウン・ソホル作 すみ訳『5番レーン』）

（注1）ナル

漢江小学校に通う六年生。水泳部の女子部員であり、チームのエース。サラン、セチャン、スンナム、

ドンヒも同じ水泳部に所属している。

（注2）キム・チヨヒ

ナルとは別の小学校に通う六年生。水泳部の女子部員であり、ナルのライバル。

（注3）スンナム

漢江小学校に通う六年生。水泳部の部長をつとめる男子部員。

問一 傍線部 a 「おじけづいている」、b 「無鉄砲に」の意味として最も適当なものを次のの中から選び、それぞれ記号で答えなさい。

a 「おじけづいている」 ア 落ちこんでいる イ 緊張している ウ あきらめている
b 「無鉄砲に」 エ こわくなっている オ 覚悟を決めている

「おじけづいている」

「無鉄砲に」

「落ちこんでいる」

「こわくなっている」

「緊張している」

「あきらめている」

「おじけづいている」

「無鉄砲に」

「落ちこんでいる」

「こわくなっている」

「緊張している」

「あきらめている」

問二 傍線部①「メンタルの強さだけで勝てないときだってありますよね」とありますが、このような言い方でナルが本当に主張したいことは何ですか。

問三 傍線部②「がつかりしたようないら立ち」とありますが、スンナムはナルのどのような態度に対して「がつかりしたようないら立ち」を感じたのですか。

問四 傍線部③「申し訳ないと思う気持ち」とありますが、ナルがスンナムに対して申し訳ないと思うのはどうしてですか。六十字以内で答えなさい。

問五 傍線部④「よくわかりません」とありますが、コーチの言葉を理解することができないのは、ナルがどのような考えを抱いているからですか。解答欄に合うように十五字以内で答えなさい。

〔三〕次のカタカナの部分を漢字に直しなさい。

- | | | |
|---------------|---------------|-----------------|
| 1 カンソな生活をおくる。 | 2 アツカンの演技。 | 3 今後の方針をキョウギする。 |
| 4 年功ジヨレツ。 | 5 月の表面をタンサする。 | 6 イニン状を渡す。 |
| 7 キュウトウ器が壊れる。 | 8 しずくが外れる。 | 9 日が夕れる。 |
| 10 キヌの名産地。 | | |

國語解答用紙

受験番号

氏
名

評 点

と筆者は思っていないところ。

という考え方。

6	1
7	2
8	3
れる	
9	4
れる	
10	5

【三】

問五

問四

問
二

問
一

問
一

1

問五

問
二

問一

問
一

—】

A vertical rectangular frame with a dashed vertical line on the right side, and a horizontal line near the bottom.

a

1. **What is the primary purpose of the study?**

と筆者は思つていな」と云ふ